資料

西田幾多郎・全集未収載遺稿（三）

三　アウグスチヌスの三位一体論

アウグスチヌスの『三位一体の十五篇』De Trinitate Libri XV. の中に含まれた三位一体に就いての考は古来此論に就いて書かれたもの丶中で最も深いものだと云はれて居る。アウグスチヌスが如何に三位一体の解釈を求めたかを見よ。

アウグスチヌスは之を最も深き自己の内省に求めたと云ふことができる。深く我々の自己を内省するに、自己と自己の意識と自己の愛と、此三者は直に一である。完全なる自己の知識即ち自覚が自己自身を知る自己其物であり、完全なる自覚に依つて完全に自己を愛すること即ち完全なる自愛が自己を知り自己を愛する自己其物である。アウグスチヌスは次の如く云つて居る。精神が己を知り己を愛する時、そこに精神、愛、知の三位一体が現れる。此の三者それ〳〵別であるが又一つが他の二つに於てあり、二つが他の一に於てありそれ〳〵が又直に全体である。自知の主体として又自愛の主体としての自己は相対的であるが、自己は自己としてそれ自身に於て自己である。自覚は自己の作用ではあるが、自覚はそれ自身に於て作用を含むと考へることができる。自愛に就いても同様のことが云ひ得るのである。斯く三者が各独立と考へ得ると共に、互に一が他に於てある。愛する自己は愛に於てあり、愛は愛する自己の自覚に於てあり、自覚は自己を知る自己に於てあるのである。又その一つ一つが他の二つに於てあると云ふことがで

きる。自己を知り且つ愛する自己はその愛と知とに於てある。自己を愛し且つ知る自己の愛は自己とその知とに於てある。自己を知り且つ愛する自己の知は自己と其愛とに於てある。何となれば自己は知りつゝ自己を愛し、愛しつゝ自己を知るが故である。斯くして又二つが他の一に於てあると云ふことができる。自己を知り自己を愛する自己はその知と共に愛の中にあり、その愛と共に自覚の中にある。而して自愛と自覚とは元来自己を知り自己を愛する自己の中にあるのである。又それ〴〵の全体が全体に於てあるといふことができる。三つのものが完全となつた時、自己は全然自己を愛し、全然自己を知り、又その全き愛を知り、その全き知を愛し得るのである。以上の如くして三者は不可分離であつて、而も一々が本体的であると云ふことができるのである。

　アウグスチヌスは自覚的精神が三位一体の映像〔で〕あることを示した後、如何にして自覚的精神が自己の本質を知り得るか、又如何にしてそれが三位一体を指示し得るかを論じて居る。我々は知らざるものを愛することはできぬ。愛を以て自己を知らんとする精神は既に自己を知り居るものである。斯くして真の自覚作用によれば、精神の本質は記憶、知識、意志の三つのものにある。氏は之に三位一体の形式を応用して居る。我々の知覚では見られる物、見る眼、欲する意志が各々別であるが、我々が精神的になればなる程、此三者は一つとなる。神の本質は彼の創造物に依つて知ることができるから、此考に於てかれの本質を髣髴することができると考へた。

　伝ふる所によれば、アウグスチヌスは一日思を三位一体の問題に沈めて、ヒッポの海浜を徘徊した時、一人の童子が手にて海水を汲んで居るのを見た。アウグスチヌスが汝は何を為し居るかと尋ねたら海中の水を汲み尽さんとして居るのであると答へた。アウグスチヌスはそれは不可能なことであらうと云つたら[1]、それでも君の三位一体の思索程に不可能でないと云つたさうである。

四　現今の理想主義に就て

一

先づ私は何故に此の様な題を撰んだかに就て一言しなければならない。

現代日本の学界及び一般思想界に於て此の理想主義と云ふ語は非常に誤解されて居るのである。

その著しい点を挙げれば即ち理想主義は近代に発達した自然科学に相反する傾向を持つと云ふことまたは理想主義は単に主観主義である、個人的なものに過ぎない随つてそれは厳密なる客観的なる科学に反すると云ふのである。

此等の誤解は現今の理想主義の意味を充分に理解しない処から起つて来るのに外ならない。

成程此の理想主義を単に外面的にリテラリーに見る時はそれは自然科学に反する様にも考へられそれはまた単に個人的、主観的と考へられないでもない。然しその誤解は理想主義その者に就ての深い洞察と自覚によつて除かれ得るものである。

十九世紀の初期に起つた理想主義は主観を主としたもので自然科学と相容れない弊に陥つたこともないではない、しかしそれは十九世紀の半頃に於て一度それを以て一切を説明し様うと企てしかもそれをなし得ずして幾多の鍛錬を経て再び現れたものである。

現代に於ける理想主義に対する誤解や反対は既に五十年前に於て劇しくあつたものであるが、鍛錬されたる現代の理想主義は説明し得られなかつた反動の現れであると見る時それは決して単なる主観主義のものにあらずして経験現実の根底に徹してしかもその究極に於て理想を探究すると云ふことは妥当の考へであらう。

二

現今の理想主義といふものには二種あつて二つの立場から出立したものである。一つは重（マヽ）に仏蘭西に於けるベルグソン（Bergson）を中心とする理想主義であり他の一つは独逸に於ける新カント学派（Neukantianismus）を取巻く理想主義である。その二つは共に出立点を異にして居るが、しかも結合し得る結論を持つて居るのである。前者は経験の概念から出立してその経験の概念を深めて行つて終に精神主義、理想主義となつたもので後者はカント（Kant 1724-1804）より流れ出たる認識論の立場よりして理想主義を組織せるものである。此等二つは現今の理想主義に於ては共に表と裏との如き関係を持つて居るのである。

先づ経験から出立して理想主義に到達する道程を考へて見やう。経験とは近世哲学の初め英国に起つた思想であつてその重（マヽ）なるはロック（Locke 1632-1704）である、而してその後に出でその考へを徹底的に考へたのはヒューム（Hume 1711-1776）である。

経験とは何か、吾人はそれを徹底することにより理想主義に達することが出来るのである。普通に経験と云ふのは外界に物体がありそれが吾人の主観の心から離れてそれ自身により固定されたるもので、此の如きものを知識が普遍的と考へるのである。酸素と水素とを加へれば水が出来る如くそれは必然的に何時、何（マヽ）かなる場所に於ても酸素＋水素＝水を認める事実が証明されるときそれが経験的の真理となるのである。

心とは普遍にこの肉体と共に消滅するものでそれを離れて存在するものではない、肉体を離れるのみならず睡眠の間には心は存在しないのである。

その心から離れて客観的に存在するもの、其処に経験の確実性があるのである。
自然科学者は外界に物あり我々がそれを感ずるのであると考へ、心は肉体と共に生滅するものであるが、心を離れた外界の知識が普遍なるものであると云ふ。
併し此の考を批評的に反省して見る時、真の経験の意味は自づと変つて来なければならないのである。ロックの次に出たヒユームは已にその考へに対する批評的の反省を加へて居る。
外界に物あり心を離れて存在するとは普通に云ふ経験論の基礎をなすものであるが外界に存在する物とは如何なる物か？　吾人は自己を離れて外界を知ることは出来ぬ、コップや机が眼に見えるとすればそれは眼の感覚と云ふ以上何も云ひ得ないのである。
そうすれば物の存在と云ふことも矢張り主観の感覚にすぎない。しかれば如何にして客観と云ふことが考へられるか、それは同じ様な経験の感覚が幾度も繰り返されそれによつてそれを統一し綜合してそれを客観的にあるものと考へるのである。
されば物の存在と云ふは決して主観を離れたものではなく感覚の一般的結合であると云へるのである。
吾人が経験以上のものを考へるとき吾人はそれに経験以外の思想を加へるのであつて、真の思想は感覚の一般的結合と云ふ以上にはないのである。
「鋭い者」とカントによつて思はれたヒユームは既に此事を云ふて居る。(Treatise on Human Nature)

三

翻つて感覚の持有者たる自己の概念を反省して見やう。
自己とは何か、自己を反省して見るとそれは甚だ不明瞭なるものである。自己とは一種の感情である。

ヂェームス（William James 1842–1910）は自己に就て次の如きことを云つて居る〔。〕（Principle of psychology）「即ち自己とはアメリカの野で牧者が多くの羊を放つと何れが何れやら分らなくなつてしまう、その混雑を避けるためにその羊に焼印を押す、自己とはこの焼印の如きものである」と、此は一の譬喩であるが要するに自己とは精神の中に焼印を押した様なものである。

我と云ふ一の存在が所謂現実以外にあると云ふことは怪しくなつて来るのである。

ヒュームはその Treatise の中に Personal identity に対する懐疑を論じて居る、かくして普遍の経験の意味が不明瞭なものとならねばならぬ。

しかしヒュームの時代に於てはそれを徹底して考へると云ふことは不可能であつたのであらう。

十九世紀になつてヒュームの云ふ意味を徹底する様になつた。即ち現今の思想界に於てヒュームの如き考を徹底して純粋経験主義の光明を求め得たのである。

マッハ（Mach 1838–1915）などは此の思想を徹底的に考へた人である。

マッハはヒュームの思想を基礎としたのである。即ち経験とは感覚である、即ち感覚以外に物の存在を認めないのである。そして終に自我も吾人の感覚の中に還元されてしまうのである。即ち自我は感覚の結合となる、氏は感覚一元論者ですべての経験を感覚として説明しやうとするものである。

アヴェナリウス（Avenarius 1843–1896）などの考へもマッハと同じ傾向のものである。

その立場から云ふとき普通の考へでは自然科学は唯物論（マテリアリズム）であるか（ママ）今は反つて唯心論（スピリチュアリズム）となるのである。

現今に於て深い進んだ経験論はこの立場をとる。

随つて外界に物があると云ふのは進んだ自然科学又は経験論のとらない処であつてマッハなどの考へによつて居ると云つてもよからう。

キルヒホッフ（Kirchhoff 1824-1887）もマッハなどと同じ考へによつて彼の力学（メカニック）を説いて居る。

物理学は何か外界に存在する実在を知る科学と云ふ様に考へられて居るがそれは誤つて居る。真の物理学（メカニック）は運動を簡単に記述する（Describe）ことである。即ちそれは一種の記述の学であると云つて居る。

運動とは吾人の精神現象の変化である。一つの球が右から左へ動いたと見るは一方から見れば感覚の右から左への変化であると云ふことが出来る。而してそれを簡単明瞭に記述することが力学であると云ふのである。

言語の例をとつて云へばコップと云ふものを何国の語で云ひ表してもその内容は不変である。たゞその感覚のみ吾人に直接に与へられたるものなのである。

ヘルツ（Hertz 1857-1894）はその物理学に物体と云ふ概念を用ひずして一個の物理学を組立てゝ居る。そしてそれは最も徹底したものと考へられて居る。

四

理想主義の唯心論は現今の自然科学の考へとは何等異る処はない。それを矛盾するが如く考へるのは誤りである。それは科学の発達を充分に理解しない処から来るものである。プラグマチイズム（Pragmatism）もその様に考へて初めて真の理解を得るのである。

物理学とは実在を表すものにあらずして感覚的経験を統一する符徴の如きものであるから真理とは便利なる語であると理解し得るものである。

マッハの云ふ思考の経済（Economy of thinking）はとりもなほさずプラグマチイズムの精神である。

即ち最も簡単明瞭にすることが真理である。

それであるから実用が真理であると云ふ考へも出て来るのである。

マツハなどの経験の考へは経験から唯心論に至るのであるがそれは現今の自然科学又はプラグマチイズムなどと矛盾せないのである。

ベルグソンは此の如き考を一層深くしたものである。

マツハなどは感覚を基礎とするが更に進んで直接経験とは何か。直接に与へられたるものは切れ切れのものにあらずして統一された全体であるのである。

コツプと云ふ与へられたるものは「円い」「底」「手」等の感覚の集合したもので真に吾人に直接なものではない。真の直接の実在は分つ可からざるもので、それを分けると云ふことは已に第二義に堕して居るものである、それは思惟され反省されたるものである。

何等の反省も加らない以前の物は切れ〳〵のものではなく全体としてのものである。それは所謂知識にて知り得ない一の活動である、それはすべての言語や思想を離れて居るのである。これがベルグソンの所謂持続（Duration）の考へである。氏は持続を真実在とするのであつて自然科学は之を翻つて見て一の形式によつて組立てられたるものである、それは実在そのものを顕すものではないと云ふ。

此の如くベルグソンに至つて一層理想主義的となり直接に与へられたる活動は却つて芸術的直観の如きものとなる。主観と客観とを合したる芸術の世界それが真の経験の世界となるのである、それに達すると経験主義は徹底した唯心論となり彼自身精神主義とさへ云つて居るのである。かくして自然科学は唯心論と何等の矛盾する処なく現実が直ちに精神となるのである。

情意の世界に住む芸術家の創造するものが実在の真相であると云ふべきである。

多くの経験論は大概マツハの考へ位に止つてしまうものであるがベルグソンはそれをより高くに徹底さしたものである。ヂエームスもベルグソンと同じ程度の考へを持つて居た。

彼の思想の完成は晩年であつたが彼は経験に就て深い洞察を持つて居た。彼は従来の経験論に対して自分の経験論を Radical Empiricism と呼んで居る。

ベルグソンは早くから仏国内では相当に認められて居たかも知らぬが世界的のものとなつたのはヂェームスがベルグソンを English speeking world に紹介したのに待つものである。それ程ヂェームスの考へはベルグソンに接近して居たのであつてその事はそれを証して餘りあることである。

五

経験の考へによつて理想主義にまで到達した思想を大体説述した故に次には認識論の考へより発展して唯心論を構成する道程を見やう。

此の方面は遥かにカントの認識論から出立して居る。

カントに於ては種々の経験的事実は吾人の主観によつて与へられたる材料を一の型に入れてそれを組立てゝ出来たものであつて、主観を離れた物自体（Ding an sich）(2) は経験の対象とはなり得ないのである。与へられたる材料を主観の型によつて組立てると云ふのは要するに時間、空間、論理の範疇にあて篏めることである。そしてその型に入れ得ない真の物自体は知り得ないのである。これはカントの認識論に於ける根本的精神である。現今の新カント学派は大体その精神を受継いで居るものであるか(ママ)しかしカントのそのまゝではない。

こゝに現今往々に見受ける誤解に就て注意しなければならない。

カントは知識は主観の形式による即ちアプリオリによつて外界の材料を組立てるものであるとすると速断することに於て誤解を生ずるのである。

概略カントの認識論に対する誤解には二様あるのである。一はカントが「主観の形式」と云ふ故に其は事実を無視

するものであるとするのと、一はアプリオリと云ふ固定した概念を持つと云ふのとである。

成程カントは主観と云つて居るけれどもそれは心理的、個人的の主観ではない。各自の空想や特質に束縛される個々の主観ではない。超個人的の云はゞ論理的主観とも云ふべきものである。

カントがその純理批判（Kritik der reinen Vernunft）の第一版を出した当時に於て已にそれに対する誤解と反対とはあつた。

バークレー（Berkeley 1684–1753）は知識は各人の主観なりと云ふがバークレーの理想主義とカントの理想主義とを同一に見ることは誤りの甚しいものであると云はねばならぬ。カント自身その「純理批判」の第二版に特に注意して自分の考とバークレーのとは異ふ（ママ）と云ふことを論じて居る。それにも係らず彼に対する誤解はあつたのである。

カントの云ふ自我即ち時間空間論理の範疇の統一である処の主観は決して個人の心理的の主観ではない。それは即ち論理的意識とも云ふべき大我の主観である。

カントはそれを意識一般(3)（Consciousness in general）と呼んで居る、彼は経験的事実を認めないのではなく却つてその根拠を立てやうとして居るのである。

自然科学は意識一般から成立するものであるから、かへつて自然科学に普遍的基礎を与へやうとするのがカントの目的であつたと云ひ得やう。

その意識一般の意味を誤解しない様にしなければカントを真に理解することは永遠に不可能である。

次に知識にアプリオリが有ると云ふに付て多くの誤解がある。それはカントの云ふアプリオリの意味は、知識は時代によりても変化せないと云ふことではない。無論カントは数学の公理は不変なものゝ様に考へて居るが、今日の数学者の中にはその公理さへ変ると主張する人がある。その点から見たならばカントのアプリオリは誤つて居ると云へるだらう。しかしカントの云ふアプリオリと云ふのは一の学問が成立するには必らず依らねばならぬ仮定があると云

ふのである。たとひ真理の内容は変動しても其処に不変なる根本仮定があると云ふ意味である。

幾何学の例をとつて見ても従来のユークリッド幾何学の外に非ユークリッド幾何学と云ふ種々の幾何学はあるとしても幾何学のアプリオリは其等を超越して不変なるものであるのである。

六

玆に残されたものは所謂カントの物自体の問題（Problem of thing in itself）[4] である。即ち直接に与へられた世界の問題である。

カントは不可知のものとして此に触れなかつた、それを知識以上の直観の世界とすれば今日のベルグソンの持続の如きものとなる。そう見れば玆にカントの流を汲む認識論的思想はベルグソンの直観の哲学と結合して共に提携することが出来るのである。されば知識とは一の仮定の上に立つものであつて科学的認識は真実在そのものを捕へることは出来ずたゞ一の型によつて実在を見るのである。真の実在はその型を超越した知識以上のものである。それは吾人に知り得ない。たゞその者と一になると云ふことのみ之を知るのである。

其の世界に於てはたゞ体験（Erlebnis）あるのみである。

それで知識と異る情意の世界に於て真実在の風光に接するものである。

私は真言宗の教理に就ては深く知らないがしかしそれは一の象徴（Symbol）の様なものによつてその真実在の世界を体得しやうとする芸術的直観の宗教ではなからうか。

若しそうするとならばそれは現今の理想主義としつくり結付くべきものではなからうか。

即ちそれは象徴によつて真実在の世界を現実に顕すべき神秘的宗教ではなからうかと思ふ。

（完）

五　ボードレールの異国人

余一日ボードレールの「小散文詩」を繙いて其中余の深い同感を唆る様な一文を見出した。それは巻頭にかゝげられた「異国人」と云ふ一小品である。

汝は誰を最も愛するか、不思議なる人よ、汝が父か
汝が母か、汝が兄弟か
余には父もない、母もない、兄弟もない
さらば汝が友か
友とかや、異なる語を聞くものかな
汝が故国か
余は余の故国が何処なるかも知らない
美か
余は時々美を愛せないこともない
金か
余は君が神を悪む如く金を悪む
さらば不思議なる異国人よ、汝は何を愛するか（ママ）
余は雲を愛す、そこ行く雲を愛す、不思議なる雲よ

〔編輯者注〕
（1）原文は「……と云つたから、」
（2）原文は「Ding on sich」
（3）原文は「Covsciousness」
（4）原文は「fo thing in itself」
なほ、（ママ）は原文のままであることを、〔　〕は編輯者の追加であることを示す。

解題

大橋良介

前号（五五二号）および本号に報告された西田幾多郎博士の全集未収載論稿はすべて、『智山学報』という雑誌に掲載されたもので、その発行年月、号数、頁数は左の通りである。

一　「ヤコッブ・ベーメ」……『智山学報』第一号、大正三年十二月一日発行、三九〜四三頁。
二　「哲学のアポロジー」……『智山学報』第三号、大正五年六月十七日発行、十一〜十四頁。
三　「アウグスチヌスの三位一体論」……『智山学報』第五号、大正七年六月十七日発行、十四〜十六頁。
（以上、五五二号に所収）
四　「現今の理想主義に就て」……『智山学報』第六号、大正八年七月十五日発行、十七〜二七頁。
五　「ボードレールの異国人」……同号、一〇一〜一〇二頁。
（以上、本五五三号に所収）

『智山学報』は真言宗智山派（総本山は京都・智積院）の私立大学智山勧学院内、「興風会」より発行されていた非売品の会誌である。これは大正三年から大正十四年まで十三号を刊行したのちに廃刊となったが、「智山勧学会」によって昭和五十八年

に覆刻版が出されている。この雑誌は『仏教学関係雑誌文献総覧』（国書刊行会編）にも登録されているので、第一号から第十三号までの全目次をそこで見ることはできる。ただし、前号および本号掲載の西田博士の五点の論稿は、この『総覧』の目次には出てこない。おそらくはこのために、三度にわたる岩波書店の『西田幾多郎全集』編纂の際にも、この五点がその都度の資料収集の網から洩れたものと思われる。

なぜこの五点が『総覧』の目次に出てこないかといえば、そこでは巻頭言、彙報、随筆、創作、対談、口絵解説等々は「割愛」されたからである（同書『凡例』より）。ちなみに西田博士の論稿は『智山学報』第一号では「雑纂」の部に入れられている。全国の大学図書館で『智山学報』の覆刻版を所蔵しているのは大正大学だけであるから、上記『総覧』の「目次」に洩れた論稿を覆刻版によって直接にたしかめることは、そう手軽にはできない。幸いにして京都・智積院の教学部にもこの覆刻版が置いてあったので、同部教務課長、小宮一雄氏のご好意により、筆者はこれを閲覧することができた。

この五点の論稿が陽の目をみるに到った経過は、遡れば西田博士と上記私立大学「智山勧学院」との結びつきとも無関係ではないので、まずこの両者の結びつきに触れておきたい。西田博士の「日記」をみると、大正二年十月二十二日に「午後榊君来訪、智山派の学校の件につき話す」とある。「榊君」とあるのは、当時の西田博士の京大文学部における同僚、榊亮三郎教授であったと思われる。この榊氏の紹介で同月二六日に金森という人が西田博士を尋ね、十一月十一日の日記に「午後始めて智積院に行く」という記事が出てくる。以後、大正十一年四月まで「午後智積院に行く」という記事が、それも決まって火曜日に、くり返し記されている。大正の終りごろの日記は極めて不規則で簡単であるから、実際には「午後智積院に行く」ことは、もっと後までつづいていたかもしれない。

西田博士と真言宗智山派の大学との十年間にわたる結びつきは、どういう内容のものであったのだろうか。この点についてはなおも調査を必要としているが、ただ、『智山学報』第一号の事実上の巻頭論文が西田博士の「ヤコッブ・ベーメ」であることや、この第一号巻末の寄附者名簿に「金拾円」を「興風会」へ寄附された博士の名があること、さらに「現今の理想主義に就て」が勧学院の講堂落成式での講演であることなどから、博士が「智山派の学校の件」に深く関与されていたことが窺えるであ

ろう。

ところで当時の智積院の事務長職にあった青木栄俊師が西田博士と懇意であったことを聞いた。（青木師は千葉県・見徳寺の先々代住職でもあり、西田博士と先々代住職との親交については現住職の青木真人師から伺った。）。博士はこの青木師に『智山学報』掲載の「哲学のアポロジー」の直筆原稿を贈られたものと思われる。その原稿に添えられた色紙「哲学のアポロジイ東山二十五年の夢の跡」の言葉からすると、その時期はこの論文を記してから二十五年後の昭和十五年頃のことであろう。この原稿のコピーを、見徳寺の先代住職、青木謹爾師が数年前に金沢・宇の気町の西田記念館へ持参されたのである。西田記念館に所蔵されていたこの「哲学のアポロジー」生原稿の掲載場所を筆者が探しているうちに上記五点の論稿の発見となったのであるが、上述から分かるようにその経緯は、もとを辿れば見徳寺住職・青木家の三代にわたるそれぞれの寄与に負うものであった。

五点の論稿の内容についてはここで解説を述べる必要はないであろう。ただ、最後の「ボードレールの異国人」についてのみ付言しておきたい。これはボードレールの散文詩（prosa en vers）一篇が記されるのみであるが、明らかに西田博士自身の訳によるものである。第九行目「余は時々美を愛せないこともない」は、ボードレールの原詩では “Je l'aimerais volontiers, déesse et inmortelle” とある。だから、原詩の行の後半（déesse et inmortelle）は訳の中では省略されている。また「美」（la beauté）は原詩の中でのこの語の連関からみて「佳人」とでも訳すべきであっただろう。その他、訳としては少し粗っぽいところもあるが、しかし、西田博士自身の言葉としてみれば、全体は博士の独特の文体と語調とで貫かれている。当時の西田博士の関心領域の一端を示すものとして、この「ボードレールの異国人」には興味深いものがあるであろう。

（筆者　おおはし・りょうすけ　京都工芸繊維大学工芸学部〔哲学〕教授）

〔追記〕本号編集後、雑誌『改造』からさらに三篇の全集未収載遺稿が発見されたむね、大橋良介氏から連絡があった。なるべく早い機会に収載する予定である。〔編集者〕